



山崎俊樹さん(59歳・写真11左)は、多発性骨髄腫だ。妻の涼子さん(54歳・同写真右)と共に病氣と闘っている。骨を壊す働きをする細胞が活性化され骨がもろくなる病気で、俊樹さんは胸椎を骨折、一時は寝たきりになった。だが、懸命なリハビリで、現在は近距離の散歩ができるまでに回復した。訪問看護や訪問リハビリは医療保険。介護保険では福祉用具貸与のみを利用する。「骨をいたわりながら、機能の回復をどのように図るのか」が大きなテーマ。訪問看護師の岡野千鶴さん(写真12左)と大町さんは、山崎夫妻を交え、作戦会議を重ねている。



グリーフケアも大切な仕事だ。この日は、夫の3回忌を終えたという横田妙子さん(67歳・写真13)を訪ねた。大町さんが横田夫妻とかかわり始めたのは、夫の勝彦さんのがんが骨や小脳に転移し、在宅ターミナルを決心した頃だった。勝彦さんは抗がん剤治療を続けながら、息子の結婚式出席の重任を果たした(写真14)。その後、残された時間はわずかだったが、大町さんらが提案した焼き物づくりに取り組んだ(写真15)。「あなたに会えてよかった」は、亡き勝彦さんの言葉だ。妻の妙子さんには、「(最後まで家に居らせてくれて)すまんかったなあ」と介護の苦労をねぎらったという。

